

芥川龍之介 「蜜柑」

メディアとは、ごく簡単にいうならば、Aと非Aを結びつけ、情報を伝達する媒体のことです。そして文学とメディアの関わりについて考えようとするなら、ふたつの視点が思い浮かびます。ひとつは小説を伝達する媒体としてのメディアです。紙の書物や電子書籍が、その代表です。小説がどのようなメディアによって読者のもとに届けられるのか、それは文学を考えるうえでとても重要な視点となります。この点については、たとえば紅野謙介『書物の近代』（筑摩書房、1999年）などが参考になります。他方、近代に誕生した小説が、同じく近代に次から次へと発明されるさまざまなメディアと、どのような関係を取り結んできたかを見ていく方法があります。ここでは、後者の視点に従って、文学とメディアの関わりについて考えていくことにしましょう。

それではLessonです。取り上げるのは芥川龍之介の「蜜柑」です。1919（大8）年5月の「新潮」に、「私の出遇った事」という総題のもとで、「沼地」とともに発表された短編です。

● Lesson 1

次の一節の中でメディアとして登場しているものは何でしょうか。またそのメディアが結びつけているものを「AとB」という形であげてみて下さい。

ある曇った冬の^{ひぐれ}日暮である。^{わたくし}私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私のほかに一人も乗客はいなかった。外を覗くと、うす暗いブラットフォオムにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、ただ、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、吠え立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議なくらい似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようのない疲労と倦怠^{けんたい}とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落としていた。私は^{がいとう}外套のポケットへじっと両手をつっこんだまま、そこにはいつている夕刊を出して見ようと云う元気さえ起らなかった。

が、やがて発車の笛が鳴った。私はかすかな心の^{くつろ}寛ぎを感じながら、^{うしろ}後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずると^{あと}後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先にけたたましい^{ひよりげた}日和下駄の音が、改札口の